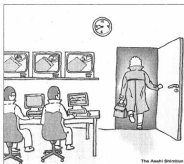


米国の睡眠センターで初めてトレーニングを受けて一番驚いたことは、それまで自分で夜起きてやっていた睡眠の検査（睡眠ポリグラフ）を専門に受け持つ職種（睡眠検査技師）があり、睡眠の見張り人をやっていたので、医者は夜、家に帰れるという点であった。当時、日本の大学院で、自分で検査を担当し、そのデータをまとめるために一人で要戦苦闘していた身にとっては、まさに夢のような世界であった。

さらに、検査室は広く、バスルームもついている、米国の一般家庭の寝室として十分機能する

ZZZ 眠って、元気に ZZZ

米国流、夢の検査室



だけのものがそろっていい。しかもここには、きちんと睡眠が取れる環境を整備している。というのがその理由だ。

た。

この検査室は六つあって毎晩同時に6人の患者が検査を受けにやってくる。各検査室からケーブルが中央コントロール室につながっており、そこから2人の睡眠検査技師が機器を操作することができるのだ。

そのかわり、医師は毎朝、早めに集合し、前夜の6人の検査結果をすべて検討する。患者は、朝、睡眠センターを出ていき、結果説明は後日となるが、昼間の外来診療には患者一人に30分から

1時間の時間をかける。診療も医師のオフィス（個室）であり、とてもおしやれである。

しかし、こうした医療を可能にするのは、高額で複雑な私的保険加入を前提とした米国の保険制度である。一方、その陰には国民の13%が無保険者で事実上医療を受けられないという現実がある。

医療は高額なものというのが米国の常識であり、国民皆保険に慣れた日本でこういった夢のセンターを発見することは是非か。その後、私はずっと悩み続けている。

睡眠専門医
立花 恵子